

87 誌上発表

神農伝説成立の経緯の考察

岩間眞知子

東京都

昨今の茶書の多くが『神農本草経』に、神農は一日に72毒に中るも茶で解毒したとある」と述べている。それが事実でなく、清朝までの医薬書にも見えない文であることを『茶の医薬史』（思文閣出版2009年）で明らかにした。では、なぜそうした伝説が生まれたのか、成立の経緯を考察したい。

最古の茶書『茶経』で陸羽は「茶の飲を為すは、神農氏に発す。（茶之為飲、発乎神農氏。）」と、神農を喫茶の始祖としたが、神農とはどのような存在だったろう。

神農は戦国時代の『孟子』から見え、諸子百家の農家の人々が、君主も民とともに農耕に従事すべきだという神農の教えを広めていたという。『呂氏春秋』になると、神農は黄帝とともに理想の古帝王とされ、『易』繫辞伝・下には、神農は農具を開発して農耕を教え、市場を開設して交易を教えたという農業神とされた。さらに『淮南子』修務訓に「神農は百草を嘗め、その滋味や甘苦を認識して、人々に取るべきものと、避けるべきものを知らせた」といい、医薬の祖ともされるようになった。

晋代の『帝王世紀』（『太平御覧』721所引）で、神農は炎帝とも称されている。炎帝と神農を称することは、司馬遷の『史記』五帝本紀から既に見え、焼畑農業との関連から農業神・神農に付された名称とされる。『搜神記』巻一では、神農が楮い鞭を使って、百草を見分けたと説く。また「三皇本紀」（唐代になって司馬貞が『史記』巻首に補足した部分）でも、農業神であった神農が、薬としての適否を見るために楮鞭で草木を鞭打ち草（薬）を嘗めたとする。しかしここまで辿っても、神農が毒に中るも茶で解毒したという文は見えない。

さて、元末明初に著された『医経溯洄集』（王履 1367年ころ）の巻頭第一に「神農百草を嘗るの論（神農嘗百草論）」があり、『淮南子』では神農が毒に遇うところで終わるが、ひどい毒ならば、神農は死んでしまったはずだ。どうして解毒し、蘇ったのか」と神農が解毒した理由を求めた。

明代になると、周游『開關衍釋』に明の王夔（子承）が施した注解に「神農の体は玉のように透明であったので、五臓の様子をみることができた。そこで一日に十二毒に中っても、直ちに見て対応でき、百足虫を腹の中に入れて、それぞれが一足となり、さらに千変万化して、毒を消した」とする。ここでは七十毒ではなく十二毒となり、また毒を消すのは百足虫だが、この解毒方法はいささか荒唐無稽である。そして清代の孫壁文『新義録』および陳元龍の『格致鏡源』巻二「飲食類・茶」になって、ようやく「神農は毒に中るも茶で解いた」という文章が確認できる。

このように「神農が毒に中るも茶で解毒した」という伝承は、清代になってから現れたとみられ、その成立には、このような経緯が辿れる。つまり漢代の『淮南子』の文は、神農が毒に中ったところで終わる。それに対して、元末明初になると、酷い毒ならば神農は毒に中って死んだはずで、死ななかったとすると解毒方法があったのではないかと疑問が呈される。明代になると、神農の体は透明なため毒の所在が分かり、百足虫が体に入ってその毒を消すと発想される。しかしその発想は荒唐無稽なため、清代になると解毒作用のある茶が、その役割を担うものとして登場する。

冒頭に述べたように、最古の茶書『茶経』で陸羽は神農を茶の飲用の開始者とし、「神農食経」の文も引用した。陸羽が茶の飲用の開始者を、医薬の祖でもある神農としたことで、茶の薬効を高く評価し、茶の起源を薬用とみなしたと推察される。清代では、茶に解毒作用のある（宋・楊士瀛『仁齋直指方』等）ことは周知のことであった。そこで『淮南子』の問題に茶の解毒作用を結び付け、茶の飲用の開始者・神農は医薬の祖でもあると発想され、さらに『神農本草経』に書かれるとして箔を付け、広まった伝説と考える。